
奇妙な同居

クラッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇妙な同居

【Zコード】

N4494Z

【作者名】

クラッキー

【あらすじ】

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。
ここはどこだ？

強引で自己中心的な女性に振り回される男。高校時代の同級生の男女が繰り広げる奇妙な同居生活。

男は誘惑に耐え、平穏な日常を取り戻すことが出来るだらうか？

やつてしまつた…のか？（前書き）

久し振りの投稿です。

相変わらず、拙い文章ですが、暖かく見守って下さい。

なぜしてしまった…のか？

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。

ここはどうだ？

まず、自分の置かれている状況から把握しなければならない。

現在、寝ている場所は、フローリングの床に敷かれたカーペットの上。

毛布は掛かっているが、布団の上ではない。

この部屋は、殺風景だが綺麗に片付いている。

俺の部屋は、こんなに片付いていない。

ここは、俺の家ではないことを理解した。

そして、横に畳をやると、昨日、俺が着ていたはずのスースが、ハンガーに吊されている。

ということは、今、俺が身に附けているのは、Yシャツの下に着ていたTシャツとパンツのみ。

反対側に畳をやると、ベッドがある。

一人用よりも、少し大きめのベッドである。

そのベッドには、この部屋の住人らしき人物が、頭まで布団を被つて寝ている。

コイツは誰だ？

何となく、今、置かれている状況を理解し始めた時、目覚まし時計が鳴り響いた。

声を上げそうになるのを何とか堪え、ベッドの上の方に目をやると、布団の中から伸びた手が、目覚まし時計を止めようと、虚しく空をさまよっていた。

その手が何度か空を斬った後、布団の中から頭が出て来る。

そして、布団の中の住人は、目覚まし時計を止めると、再び、布団に潜り込んだ。

つて、オイ！

また寝るんかい！

布団に潜り込んでいる、この部屋の住人らしき人物は、女性だと思われる。

布団から伸びていた手は細く、爪には剥がれかけのマニキュアが塗つてあった。

寝癖で顔までは確認出来なかつたが、髪は長く、茶色かつた。

俺は、コイツを知つてゐる。

知らない奴の家で寝ていたら、それはそれで大問題なので少しホッとした。

そして、状況を整理する為に、昨日からの行動を一から振り替えることから始めなければならない。

俺の記憶が確かなら、今日は日曜日で、昨日は土曜日。

今日は休みだが、昨日は土曜日にもかかわらず仕事だつた。

本来、土曜日は休みなのだが、休日出勤つてやつだ。

仕事を終え、出先から直帰したはずだ。

そして、重い足を引き摺りながら駅に着くと、駅のホームのベンチに、一人でポンと座っている女性を見掛けた。

「ねえ、彼女！今、一人？暇なうどつか遊びに行かない？」

こんな風に女性に声を掛けることが出来るなら、彼女いない歴は年齢と一緒にはあるはずがない。

例えそんな芸当が出来る人間としても、この時はそんな気力もない。

俺は、綺麗な格好をしているその女性が気になつてはいたが、チラチラと遠巻きに見ているだけだった。

その女性の様子は、明らかに落ち込んでおり、ハンカチを握りしめてる。

その視線は、一点を見つめたまま、焦点が定まつていないうつだつた。

『ピンポン！間もなく電車が参ります！』

駅のアナウンスが流れた時、その女性がこっちを見た。

チラ見をしていた俺の視線と、見事に合つてしまつ。

慌てて反らしたが、彼女には気付かれてしまつたようだ。

すぐに彼女は、コツコツヒールを鳴らしながら、近づいて来る。

やべえ、文句を言われるかも…。

案の定、そのヒール音は俺の横で止まつた。

「なに見てんのよ！」

とは言わなかつた。

しかし、彼女の視線は間違ひなく俺を睨んでいた…、と思われた…。

「カワグチタク？」

「えつ…」

不意に俺の名前を呼ばれ、振り返る。

「やつぱりそ�だー・タクちゃんじやんー・久し振り！」

久し振り…と言われても誰だか思い出せない。

「えーと…、誰だっけ？」

「はあ？覚えてないの？『親友』の顔を忘れるなんていい度胸だな、
オイ！」

そう言わると同時に、脛を蹴られた。

「いってえーーもしかして、石崎香織か？」

懐かしい痛みと共に、名前を思いだす。

高校時代、よく「うやつて脛を蹴っていた。

男っぽい口調の上に、口より先に足が出る奴は石崎しか知らない。

しかし、俺は彼女と親友になつた覚えはない。

どちらかと言えば、苦手な部類だ。

ましてや恋愛感情なんて、とてもとても……。

「タクちゃん、仕事だったの？もつ終わり？」

一応、俺の名前は川口卓カワグチスグルである。

ただし、周りにスグルと呼ぶ奴は誰もいない。

友人だけでなく、会社の同僚、後輩も、『タク』、『タクちゃん』、『タクさん』と呼ぶ。

家族までもがそう呼ぶ。

高校時代、俺のことを『タク』と呼ぶ女子は、石崎だけだった。

そう考へると、彼女も友人の一人だったとは言えるかも知れない。

「家に帰るところだけど？」

「ちょうど良かったーちょっと付き合になさこよ。どうせ、暇なん

でしょ？」

そう言い終わる前に、俺は袖口を掴まれ、俺を引き摺るよつこ、石崎香織は改札に向かつて歩き出していた。

確かに暇ではあるが、俺に選択権といつもの無いのだろうか？

駅前の居酒屋に入り、高校時代の思い出話を肴に酒を飲む。

恋愛関係の話もした。

俺は、見栄をはってみたが彼女には通用しなかったようだ。

表立つて指摘はされなかつたが、彼女いな歴と年齢が一緒であることを、気付かれたと思われる。

石崎にも、そういう類いの話を突つ込んでみたかつたが、何か得体の知れない物に止められた気がする。

酒はしこたま飲んだ。

飲んだと言つより、飲まされた。

無理やりではないが、石崎のペースに合わせたら、いつも以上に飲んでしまつた。

石崎は酒が強い。

フラフラになりながら店を出た俺と違い、アイツの足取りは、かなりしつかりしていた…記憶がある。

終電には間に合わず、タクシーで帰る。

一人で一緒にタクシーに乗ったはず。

乗ったところまでは覚えている。

乗って…どうしたんだっけ、俺？

そのまま、石崎の家に押し掛けてしまったのか？

もしかして、やってしまった…のか？

俺の混乱に拍車が掛かった時、もう一度、目覚まし時計が鳴った。

今度は、彼女の枕元ではなく、別の場所で鳴っている。

すると、布団の擦れる音がした後、タンッと床に足をつける音がした。

今度は起きたよつだ。

足音がした方を見ると、女性らしく白くて細い足が、一步踏み出でうとしていた。

ちよ、ちよっと待て！

そのまま行つたら……！

「グヒーー。」

「キヤーー。」

ドタンー！

駄の「ぬき瓶」と女の悲鳴、誰かが床に倒れ込む音が部屋に響いた。

俺は誰でしょーか？（前書き）

初回は一話同時に投稿します。
今後の更新は不定期です。

俺は誰でしょううか？

「グエー、ゲホツ、ゴホツ、ゲホツ！」

見事に腹を踏まれ、悶絶する。

「痛いなー、モーー何でこんな所で寝てんのよ！」

それは、じつちが聞きたいんだが…。

彼女は、床に打ち付けた肘やら膝やらを擦つている。

「人を責める前に、謝罪の言葉はないのか？」

どんな躊躇ちゆうりょをされてきたんだ、コイツは…

「元はと言えば、アンタがいけないんでしょー。」

それは、じもつともですが…。

「とこりで…、いくつか質問があるのですが…、よろしくでしょううか？」

ひとしきり悶絶した後、ようやく起き上がり、いくつかの疑問点を確認する作業を始める。

自分自身の混乱を収めるには、田の前の人物の記憶に頼るしかない。

「回りくどい言い方してないで、せつせと言ことなさこよーだから、モテないのよー。」

「大きなお世話だー！」

ところが葉はグッと飲み込む。

「お前、県立A高等学校卒の、石崎香織だよな？」

「やうだよ。」

やつぱり、昨日、俺は石崎に再会した。

高校卒業以来だから、10年ぶりだろつか。

「俺は誰でしょーか？」

「誰つて、タクちゃんでしょ？県立A高等学校卒で、彼女いない歴が年齢と一緒にカワグチタク。」

「ラララ、勝手に大袈裟な呼称を付け足すな。

それに、『タク』ではなく、『スグル』である。

「イツも、俺のことわざちゃんと知つている。

「ソレはお前の家だよな？」

「わつだけび……、何なの、わつきからー記憶喪失の振りでもしてるの? そんなことしても、昨日、アンタが犯した過ちは許さないよー。」

過ちとは一体……。

「俺、昨日……、何かした?」

「はあー? 覚えてないの? アンタって最低! それ相応の責任はとつてもううからねー!」

俺はやはしづ。

何といふことでしょう。

肝心な部分を何も覚えていません。

「俺の方が責任とつて……ブツブツ……。」

「ブツブツ言つてないで、言いたいことがあるなら、はつきり言え! 訳ぐらには聞いてやるよー許すかどうかは別問題だけビ。」

断片的ではあるが、記憶が繋がると、冷静になつてきた。

そして、田の前に広がる絶景……もと、光景に田を奪われる。

田の前には、寝巻き用と思われるTシャツとホットパンツを着た若い女性。

Tシャツの上からでも、一つの大きめな膨らみが確認出来る。

ちゅうと刺激が強すぎた。

そして、そのまま視線を下に動かしていくと、現わになつた細く白い太ももが…

「ぐわっ…」

「なに見てんのよ！」

口より先に、彼女のそばにあつたクッションが飛んで来た。

口より先に手が出るのを、悪い癖だと思つよ…。

取り敢えず、これから俺がとるべき行動を整理する為に、洗面所に逃げ込む。

だがしかし、整理しようとも、一日酔いで頭がガンガンして、全く整理出来ない。

浮かんで来るのは、先程の寝巻き姿の石崎ばかり…。

この時、俺が冷静ならば、あるいは、恋愛経験が豊富ならば、洗面所にあつた、使い古された赤色と真新しい青色の一つの歯ブラシの

違和感に、気が付いていただけ。」

しかし、俺が気が付いたのは、独り暮らしの女性にしては、石崎はいい所に住んでいるということだけだった。

俺が洗面所から出て来ると。

「コーヒーと紅茶どちら？」

「じゃあ、コーヒーで。それから、冷たい水を一杯。」

「かしこまりました。お会計は一万円でござります。」

さすがに、ほつたくり過ぎである。

「これは、座つただけで、福沢諭吉が一枚なくなるほつたくりバーですか？」

「JRつて、最寄り駅はどう？」

「丁駅。JRから歩いて十分ぐらい。」

「オイオイ、都会じゃないか。」

しかも、駅前。

俺の最寄り駅とは一駅しか離れていないが、駅の規模は雲泥の差だ。

独り暮らしの女性が、そんないい所に住めるものなのかな?

俺だつて、男一人で生きていくるぐらに稼いでいる。

しかし、学生時代のボロアパートこそ抜け出しあしたものの、とて
もじやないがこんな場所には住めない。

見たところ、部屋の広さは、俺の部屋の倍はある。
しかも、窓からの見える景色は、明らかに高層地帯から見えるもの
だ。

「お前、結構、稼いでいるんだな……。」

「まあね……。結構、割りがいい仕事だからね……。」

「仕事、何やつてるの?」

「……、キャバクラ……。」

「はあー?」

「私が何してようが、タクちゃんには関係ないでしょー。」

「別に咎めてないよ。ただ、ちょっと意外だつただけで……。」

だから、酒が強いのか?

だから、こんなにいい所に住めるのか?

「別に体を売つてるわけじゃないし…、いつ見ても人気あるんだから…。」

別に、俺に言い訳する必要はないのだが…。

コイツは昔から、『ミニアケーション』能力といつものが高かつたら、天職とは言えるかも知れないが…。

それに、彼女の容姿は、世間一般の評価では、美人と言えるだろうが…。

「お前の両親は知ってるのか？」

「知らないと思つよ。じつちから言つわけはないし、聞かれもしないし…。っていうか、ほとんど連絡とつてないし…。」

「お前、やつぱりまだ…。」

俺が石崎と話すようになったのは、高一の頃。

その時、コイツは父親と一緒に暮らしだった。

そのあとすぐ、石崎の父親は再婚した。

新しい繼母とは、上手くこつていられないらしい。

嫌われるとか、嫌がらせをされているとかではなく、むしろ優しいらしい。

だが、お互いどう接していいかわからず、上手くいかないのだろう。家族間の意志疎通は、コミュニケーション能力云々では、どうにも出来ないこともある。

親の再婚がもつと小さい頃なら、それなりに上手くいくと思われるが、人間、年をとると適応力というのが低くなるのだらう。

俺の家も似たようなものだ。

俺の実母が、『新しいお父さんだよ』と男の人を連れてきた時の違和感は、大人になった今でも、鮮明に覚えている。

その時、俺はまだ小学生だったから、それなりに上手く適応出来た。

しかし、本当の父親だと今では思つてゐるが、心の奥底にある違和感を、完全に拭い去つたとは言い難い。

石崎は、高校を卒業すると、進学の為に上京した。

まるで、複雑な家庭環境から逃げるようになつた。

俺も同じく上京したが、その後、お互い連絡をとつていない。

俺達は、高校時代、仲が良かつたと言えば良かつたのだが、所詮、その程度の関係なのだろう。

俺達の関係が、石崎が言つといひの『親友』とやらだつたら、10年も音信不通なわけはない。

単なる同級生やクラスメイトではなかつたことは確かだが、言わば、似たような境遇を持つ同士みたいな関係だつたのだろう。

「タクちやん、次の休みいつ？」

帰り際、石崎に聞かれる。

「来週は土、日は休みだと思ひナビ。」

予定外の出来事がなければ……だが。

「じゃあ、土曜日は空けておきなやこよ。」

「命令するなー。」

「ナツにひ態度をとれる立場じゃないでしょー。今回の借つは、わざひつ返しても、ひづからねー覚悟しておかなれこよー。」

「出来れば、お手柔らかに……。」

俺は自分の犯した罪を、どう償えば良いのでしょうか。

何でいつなる？

次の土曜日の朝、田覚まし音の代わりに、ケータイの着信音で起きた。

『はい…川口です。』

『もしもしし、タクちゃん？私！』

俺はまだ、オレオレ詐欺に引っ掛かる歳ではない。

『どうりで、皆さん、ですか？』

声の主が、石崎香織であることは分かっているが。

『相変わらずアンタは、自分の立場といつものが分かっていないようだね！』

『ハイハイ、すこませんね、体も態度もでかくて。』

『もー、あつたまた！今から一時間以内に一駅に来い！そもそもなくば、命はないと思しなさいよ！』

子供の喧嘩かよ…。

『しあうがないな、ボチボチ行くよ。』

『ボチボチじゃなくて、急いで来なさいよ！遅刻厳禁！繰り返す、遅刻厳禁！』

『分かつたよ…。』

電話を切つてからおよそ三十分、ボチボチ家を出た。
まあ、何とか間に合うだろう。

T駅の改札を抜けると、石崎はすぐに見つかった。

さすが人気キヤバ嬢、人混みの中でも目立つ。

「遅い！」

「一時間以内には来ただろ？」

「アンタには、五分前行動の概念はないの？」

仕事なら当たり前だが、私生活にそんな概念は、俺に必要ない。

彼女は、両手に荷物を抱えている。

結構な量だ。

それを、俺に向かって無言で差し出す。

ハイハイ、持てつてことですね。

「『荷物、持とうか?』って、なんで先に言えないかなあ。これだから、モテない男は…。」

男が女に、口喧嘩でかなうはずがない。

ここは、言いたいことをグッと堪えて、素直に従つておるのが正解である。

荷物の中身は、ブランドバックやブランドアクセサリー、ブランド小物、未使用と思われる靴など。

仕事上の戦利品、つてやつだらうか?

この日、俺達が最初に向かつたのは質屋。

荷物の中身を換金するよ'うだ。

そして、可哀想なのは、大量の戦利品の贈り主達。

それとも、贈り主達は、「うなることを承知で貢ぐのだらうか?

垣間見た生活ぶりからば、お金に困つているよ'うには見えなかつたが。

それに、人気キヤバ嬢ともなれば、俺より稼ぎがいいはずだが。

「…」んなに大量に換金して、お金でも必要なのか？」

「まあね…。昨日で仕事辞めちゃったし。」

「はあー？」

「だから、何でアンタがそんなに驚くのよ！それに、今、住んでる所からも引っ越し越さないといけないから、荷物整理も兼ねて。」

それなら納得だが…。

「何でまた急に？」

人気キヤバ嬢から無職に転落ですか？

「最近、色々あって、なんかめんどくさくなっちゃったから…。」

めんどくさくなったら、仕事は辞められるものなんでしょうか？

質屋で大量に換金した後は、近くのカフエに入る。

「勿論、タクちゃんの奢りだからね。」

「ハイハイ、分かつてますよ。」

特に高額といつわけでもないカフュ代べりー、奢つてやるよ。

「これでチャラじゃないからね。」

俺の犯した罪は、どのくらい重いものなのでしょうか？

全く記憶になことなのにな……。

それに、そういうことは、例え記憶がなくても、それなりの感触と
いうものが、残っていてもおかしくないんだが、それが全くないの
はどういうわけだ？

それは、そういう行為に憧れを持った、童貞の妄想に過ぎないのか？

俺的には喜ばしいことなのに、何だか釈然としないものを感じじる。

イヤ、待て、『喜ばしいこと』については、語弊がある。

それじゃあまるで、石崎を友人以上に見てしまっている、ということ
ではないか？

再び、俺の頭は混乱してきた。

「あのやあ……、本当に申し訳ないんだが、この前、タクシーに乗つ
てから、朝起きるまでの記憶が、全くないんだが……。」

『困った時は、知ってる人に聞け！』

昔、ぱあちやんがそう語つてた。

「アンタの最低つぱりを、一から説明した方がいいの?」

俺は、無言で頷くしかない。

聞くに堪えない話でも、何も分からぬいよりは、幾分マシ……だろ?。

ふんだんに彼女の主觀を交えたその話は、予想していたものと少し違っていた。

とても三行では説明出来ないが、要約すると……。

一緒にタクシーに乗り込み、まず、私の家に向かつ。

レディファーストだから当然でしょ?

今思えば、これが間違いの元だった、後悔はしている。

タクシーに乗るとすぐて、タクちゃんは眠りに落ちる。

家に着くまでには起きるだらう。

寄り掛かるな、重いから~

私の家に着いても、この男は起きない。

タクシーの運転手に、何とかしろ、お前の彼氏だろ、と勘違いされる。

運転手の奴ふざけんな、お前の車には一度と乗らない。

外に放置しようと思つたが、良心が咎めた。

仕方ないので、自分の家に連れて行く。

マンションの十階まで、180センチオーバーの大男を、か弱い女性が抱いでいく羽目になる。

マジ重い、死ね。

部屋に入ると、大男は床に倒れ込んでいびきをかき始める。

素っ裸にしてベランダに放り出そうと思つたが、死なれては困るので止めた。

でも、一遍、死ね。

シワになつたらまずいだろうと思い、スーツを脱がせてあげた私の優しさを、褒め称えなさい。

そして、毛布まで貸してあげた私を、神と崇め奉りなさい。

それから、朝起きると、大男の腹を踏んで転げる。

肘と膝に痣が出来た、治療費払え。

ところを、三十分ぐらいかけて説明された。

俺は、所々、命の危険にさらされている。

「それだけ？」

「『それだけ?』じゃねえんだよ、オイー。ふざけんな、『カラーリー

だから、ガシガシと脛を蹴るのは止めなさい、痛いから！

それから、女性が男性を、汚い言葉で罵つてはいけません！

「俺は……、やつてないの？」

バ
シ
ツ
！

「充分過ぎるほどやらかしてるだろー。」

そう口に出すより先に、頭を叩かれた。

。アカウントカード...。

「何でいうか……その……、男女間の行動というか、行為というか……ゴニゴニゴニ……。」

「何を」「ア」「ア」「ア」とつづける。謝罪の言葉が、せつせい言いなさ

「よーまだ、許さないけど。」

「誠に、申し訳ございませんでした。以後、気付けてます。」

大袈裟に頭を下げて、許しを請つてみる。

「フンー。」

姫様は、『機嫌を治してくれません。

「今、聞いた以上のことは、俺はしないの?」

「してないけど?」

「せうか…、良かつた… いつてえーー。」

「少しも良くないだろ?が!」

本氣で蹴るのは止めて!

涙が出でぐるからー

その後、店を出ると、彼女の買い物に付き合わされた。

何かを買つわけでもないが、色々な場所に引っ張り回される。

そして、彼女の家前に着いた時には、既に、日が落ちていた。

マンションの前で別れを告げ、帰るふとするが…。

「ちょっと待ちなさいよー。今田は、一日中会えとは言われていない？」

空けとけとは言われたが、一日中会えとは言われていなかつたようだ。

彼女の家に向かつたから、これで解放されると思った俺は、少し甘くつて行つた。

マンションの前で待つてゐるよつて言われ、彼女は一歩、自分の家に戻つて行つた。

良かったのか、悪かったのか…。

これから、高級ディナーでも奢られるのかな…？
金、足りるかな？

それなら、俺もこの格好じやまずくないか？

そんなことを考えながら、待つことおよそ一十分。

「お待たせ！」

彼女は、先程までとは違い、かなりラフな格好に着替えてきていた。

「ひひの格好の方が、彼女らしい氣もする。

それまでの格好は、どこかしら無理しているようにも見える。

コンタクトレンズは外したのか、メガネ姿だった。

そうだよ、コイツ、高校二年の途中までは、メガネだったんだよ！

今より、遙かに地味だつたし。

それが、キャバ嬢になるなんて、不思議なもんだ。

「これから、どこ行くの？」

「タクちゃんの家。」

「はあ？」

「外で飲んでもいいけど、タクちゃん、また潰れたら今度は死ぬかも知れないよ。私は一度と助けないから。」

イヤイヤ、ちょっとは助けようよ！

ていうか、潰れるまで飲ますなよ！

何でこいつなる？

俺の家の近くで、大量の酒とつまみを買い、結局、彼女は俺の家に押し掛けに来た。

「せまつー。」

第一声がそれですか？

これでも、28歳男性の独り暮らしだと、充分過ぎる瓜さんです
が。

一応、ヤバめのものは片付けてあるし、先週の日曜日に掃除もした。
少しだけ散らかってる物を片付け、酒類を冷蔵庫にしまつてみると
……。

「何してるんだ？」

彼女は、ベッドの下やら、本棚やらを物色している。

「ヒッチな本とかヒッチなビデオとかは、ビリにしまつてあるのか

なと思つて。」

「ハハハ、何をしているんだね、キハニはー。

簡単に見つかる場所に、隠すわけがないだろー。

この家に、そういう類いの物が見つかったら困る粗手は来ないのだが、長年の習慣からか、きつちり隠してしまつ。

隠し場所を工夫しながら、少年は大人になつていくのだよ。

「ねえ、タクちゃん。」

「ああ?」

だいぶ酒が入つてきた頃。

「もしかして…、私とやつちやつたと思つてた?」

「何を?」

「『何を?』って、セックス。」

「ばつ、ばバカなことを…!…!…!」

「やつぱつ、そつ思つてたか…。」

嫁入り前の女性が、口に出していく単語ではないと思しますが…。

「酔つ払つて記憶をなくした上に、知らない家で朝日覚めたら…、しかも、その部屋の主が女性だったら…、その可能性ぐらい考えるだろ?」

「童貞の妄想つて怖いなあ…。」

「ど、ビビビ童貞ちやうわー。」

「見栄張らなくても大丈夫だって。バカにしたりしないから。」

「…。」

「タクちゃん…、私としたい… の?…そいつ?…。」

「これが限である」とぐらー、俺でも分かる。

さすが元キヤバ嬢、と言いたいところだが、上目遣いで俺を見つめても、ダメですよ。

そんな手には、引っ掛けりませんよ。

「いいえ、全然。」

「あー、何かムカついた、その言い方…タクちゃんは、自分がどれだけ恵まれているか、考えた方がいいと思つよー。」

「どの辺が恵まれて…るつて言つんだよー。」

恋人もおらず、高校時代の同級生の女に、虜げられてこいつの二に。

「私と自宅で酒が飲めるなんて、本来は有り得ないことなんだよ。みんな店に来て、高い金払わないと、私とは一緒に飲めないんだから。」

コイツは、自分を何様だと思つてるんだ、無職のくせに！

そんな奴に逆らえない俺も、どうかしてやるぜ…。

「そう言えど、キヤバクラって簡単に辞められるものなのかな？色々、引き止めとか、しがらみとかがあるんじゃないの？」

「普通はそうだけど、結婚するって言つたら、結構、簡単に辞められた。」

「はあー？お前、結婚するの？」

何か胸の奥底がズキズキしてきた。

「しないよ。」

「はあ？」

全く意味が分かりません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494z/>

奇妙な同居

2011年12月17日12時03分発行